

日本とロシアにおける英文学の受容

——バイロン作『シヨンの囚人』の場合——

白 倉 克 文

基礎教育課程

On Acceptance of English Literature by the Japanese and the Russian

——In the Case of Byron's *The Prisoner of Chillon*——

SHIRAKURA Katsufumi

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 18, 2001 ; Accepted January 18, 2002)

I. はじめに

比較文学の研究方法の一分野として、「比較受容」という方法が提言されているが¹⁾、日本とロシアにおけるイギリス文学の受容は、それに格好の材料を提供してくれる。

日本とロシアは歴史上のある時期に、各々強力な「西欧化」政策を推し進めた。文化全般に及ぶこの体験は文学においても顕著であり、両国はその体験を通じて、己の近代文学を成立させることができた。イギリスは西欧諸国の中でもいち早く近代文学が芽生えた国であったが、このイギリスからは、両国は様々な形でその文学上の成果を吸収してきた。イギリス文学を受容する過程において、両国は共通点と共に、際だった相違点をも示してきた。先に筆者はゴールドスミス作『隠者』の翻訳状況を対比することによって、そのことをある程度明らかにしたが²⁾、今回はバイロンの長詩『シヨンの囚人』を対象として、同じ問題を考察してみたい。

まず始めに『シヨンの囚人』が作詩された背景を紹介し、作品に込められた思想的な意義を検討する。第二に明治時代以降に翻訳された各種日本語訳を吟味することによって、日本語訳の特徴について考察する。いずれの訳も原文に忠実な訳を目指していたことが明らかにされよう。第三にジュコフスキーによるロシア語訳を紹介しつつ、ロシア翻訳の特徴を明らかにしたい。それが日本語訳とは異なって、自由奔放な訳であることが確認されよう。そして最後に、北村透谷著『楚州之詩』を取り上げて、透谷の創作活動とジュコフスキーのそれとの類似性について考察する。ジュコフスキーは翻案文学の大成者でもあったが、彼と透谷との同質性に注目し、『楚州

之詩』を翻案文学の視点から位置づけてみたい。

II. 『シヨンの囚人』について

1. 創作の背景

1816年4月にイギリスを去ったバイロンは、6月にスイスのレマン湖付近のディオダティ荘に居を定めた。近くに詩人シェリーとその恋人メアリー・ゴドウィンがすでに住んでおり、そしてさらに、メアリーの義妹で、当時バイロンとの間の子供を身ごもっていたクレア・クレアモントも一緒であった。この滞在中にバイロンが訪れた様々な名所の一つに、シヨン城が含まれていた³⁾。シヨン城への訪問はバイロンに強い印象を与え⁴⁾、その結果、長詩『シヨンの囚人』が、生々しい印象に基づいて一気呵成にものされた。バイロンの友人トマス・ムアは次のように記している。「ローザンヌ近くのウーシーで・・・彼とその友人は荒天のために小さな宿に2日間閉じ込められた。そしてそこで、その短期間で、彼は『シヨンの囚人』を執筆したのであった。」⁵⁾ 長詩『シヨンの囚人』は1816年12月5日に単行本として刊行された。イギリスばかりでなく、この詩作がイタリアでも英語版で刊行されたことを、バイロンは1817年5月9日付けの手紙で伝えている⁶⁾。

『シヨンの囚人』の主人公は歴史上の人物ボニヴァールがモデルである。シヨン城とボニヴァールについては、ルソーが『新エロイズ』(1761年)の注釈に、次のように記している。「昔ヴヴェーの代官が代々住んでいたシヨンの城は湖中に半島の形をなしている岩山の上であり、わたしはその周囲で測深するのを見たことがあるが、150プラス(約800フィートになる)以上に至ってもなお底に達しなかった。・・・サン＝ヴィクトールの修道院

長フランソワ・ボニヴァールが6年間囚人として監禁されたのはそこである。彼は稀なる才能の人物で、方正にして、堅忍不拔、サヴォワ人でありながら自由を愛し、僧侶でありながら寛容であった。⁷⁾ ボニヴァールは釈放後も長生きをし、その生を全うした。『シヨンの囚人』の主人公はこのような傑出した人物がモデルだったのであり、バイロンはルソーが『新エロイズ』に記した約半世紀後に、ボニヴァールを芸術的に形象化したわけである。

2. 作品の形式と内容

原題は *The Prisoner of Chillon* であって、“A Fable” と副題がつけられている。それは「寓話」ではなく、「伝説」または「伝承」の意味で用いられたのであろう。均整のとれた定型詩であって、14連の392行から成っている⁸⁾。物語は一人の囚人による回想記の形式をとっており、彼は語り手であると同時に主人公でもある。内容的に大きく三つの場面に分けることができよう。最初は第1連から第6連まで、次は第7連から第9連まで、そして最後は第10連から最終第14連までである。

最初の場面では主人公の来歴と幽閉の状況が述べられる。父と息子6人は己の信仰に忠実であったが故に迫害され、父と3人の息子は既に殉教死している。残る兄弟3人はシヨン城の牢獄に投じられ、第2人は既に獄死し、今は長兄たる主人公だけが残っている。彼は獄中生活を回顧し、弟たちの生と死を示しつつ、自分の心境の変化を辿り、記述する。3人は同じ獄舎にいても、別々の柱に結わえ付けられており、闇の中で互いの姿も見えず、声によって僅かに相互の意志を確認し合っている。しかし時と共に彼らの声は虚ろな響きに化していく。末弟は眉目秀麗、性格も明朗で、他者への同情心に富んでいる。上の弟は勇猛果敢、山中での狩猟が得意である。シヨン城は深いレマン湖に囲まれていて、水面下にある獄舎には、激しい波音が絶えず響きわたっている。

第2の場面では、2人の弟の死の状況と、それに際しての主人公の心境が述べられる。先ず上の弟が死亡する。自然の自由な生活にのみ適合する彼は、牢獄生活に順応できず、拒食症状を招いたのである。亡骸は獄舎の土中に葬られる。次に末弟が死亡する。彼は主人公にとって唯一の生き甲斐であったのだが、運命を呪わず、残る人々に思いを致しながら、従容として死につく。彼の死の瞬間、主人公は飛び跳ねた勢いで、自分の鉄鎖を壊してしまう。すべての希望を無くした主人公は今や信仰(faith)によって辛うじて生命を保っているが、彼の感覚は完全な閉塞状態に陥ってしまう。

第3の場面では、釈放に至るまでの主人公の心的体験が、幾つかのエピソードを通して語られる。ある時青い

小鳥が現れ、霊妙なさえずりで主人公の心を和ませる。彼は今では鉄鎖をつけたまま、牢内を移動できる自由が許されている。ある時彼は壁に足場を作って、牢の格子窓までよじ登り、外界を眺める。湖、ローヌ川、街並み、帆船が見え、緑の小島も目に入る。小島には3本の高木が聳えている。魚が泳ぎ、鷺が飛翔している。彼の目に新たな涙が流出する。それと同時に彼は不安を覚え、足場を下る。闇に慣れた彼は、今や牢の中でしか安らぎを覚えることができない。やがて主人公に解放の 때가訪れるが、クモやネズミとの生活に慣れ親しんだ身にとっては、自由の身になることはもはや苦痛を伴うものでしかない。

『シヨンの囚人』の粗筋はこのようなものである。主人公の回顧は、最後の解放の時点から始まっていると読み取ることができ、最終連は直ちに第1連に繋がるべき性格を帯びている。従ってこの作品は連鎖状の構造を持つ長詩であると言うことができる。

3. 作品の主題

この長詩が掲載された単行本には、*Sonnet on Chillon* と題される短詩も含まれていた。「シヨン城詩」と題されて和訳されているこの短詩は、自由への賛歌が主題となっている。シヨン城の牢獄はボニヴァールの辛苦が宿っているが故に聖なる場所であり、土牢にあっても精神の自由が保てれば、自由はやがては勝利する、ということが、この短詩の主題である。短詩は次のように結ばれている。May none those marks efface! For they appeal from tyranny to God.⁹⁾「乞ふ、その足痕を消すこと勿れ。これぞ暴虐を神に訴ふるものなればなり。」(岡本訳)。

短詩のこのような内容から判断すれば、それが添えられている長詩『シヨンの囚人』もまた、精神の自由の不朽性を主題にした作品であるように思われる。主人公が最終的には釈放されていること、そしてそのモデルたるボニヴァールが、釈放後に自由を享受して生を全うしていること、を考慮するならば、この長詩の主題もまた、究極的には精神の自由の不朽性である、という考え方が容認しやすい。しかし長詩を実際に読んで受ける印象はむしろ逆のものであって、牢獄の中で次第に疲弊しゆく人間精神の脆さの方が、はるかに強烈な印象となって残るのである。

自由を希求する人間精神の強靱さによりも、状況に作用される人間精神の脆弱さにこの長詩の主題があると考える考え方は、当時の様々な読者の反応に読み取ることができる。後に紹介するように、ロシアではジュコフスキーやプーシキンがそのような捉え方をしているし、そして何よりも先ず、バイロンの先輩作家であるウォルター・スコットがそのような観点の典型を示しているのである。

彼は『シヨンの囚人』について次のような批評を残している。

「ボニヴァールという特別な人物を描写することがバイロン卿の目的ではなかった。この詩の目的は、スターンによる優れた囚人素描のそれと同様に、監禁を抽象的に考察することであり、監禁が動物の体を冷却し凍えさせつつ、精神力を徐々に失わせ、ついには不幸な犠牲者が、いわば土牢の一部となり、鉄鎖に共鳴するに至る、その影響を明らかにすることである。・・・ボニヴァールの土牢は・・・陰鬱すぎる題材で、画家や詩人の能力をもってしてもその恐怖には抵抗することができない。この詩が一層陰惨なのは、支えとなる拠り所を全く人間の希望に与えていないからであり、また、才能と徳を備えた人物であるにもかかわらず、受難者を、重なる受難の中で完全に緩慢で無力な存在として描いているからである。しかしながら、色彩が如何に暗かろうとも、それは一幅の絵として、バイロン卿が描きたいずれのものにも匹敵しよう。そしてまた、彼が描く犠牲者の受難に呼応しつつ、心を沈ませずにそれを読むことは不可能なのである。」¹⁰⁾

スコットが明らかにしたように、『シヨンの囚人』でバイロンが意図したことは、一定の状況下ですべての人間が必然的に経験するであろう精神の劣化を描写することであった。バイロンは主人公の精神が疲弊してゆく経過を明白に示すために、いくつかの状況を牢内に設定した。弟たちの生と死、小鳥の訪れ、主人公による牢内での徘徊、土牢の壁への足場の設置、格子窓から実感する自然美、光ではなく闇に対して覚える愛着、クモやネズミとの、さらには鉄鎖との一体感、そして最終場面の、釈放への空虚感。これらのエピソードが周到に準備され、的確に描写されることによって、主人公の心境がごく自然に読者の心に伝えられる。その意味でこの長詩は感情描写に優れていると同時に、客観描写にも卓越した作品であると捉えることができる。スコットが指摘した通り、描写が客観性と普遍性を獲得しているが故に、牢獄生活の反人間的な性格が、強烈な印象と共に感じ取られるのである。

『シヨンの囚人』が執筆された頃のバイロンの心理状態について、彼の最後の恋人テレサ・グイチオリは、次のように記している。「バイロン卿の心は致命傷を受けていたが、しかし憎悪の感情は未だそこに浸入していなかった。身に覚えた悲哀、自分に対する残虐で不実な諸悪に関して彼が得た痛ましい知識、友人たちの性格が臆病であることを知ったことによる苦悩、そして自分を犠牲にした忘恩的な多くの人々への回想、こうした感慨のすべてがそれぞれ、『シヨンの囚人』、『チャイルド・ハ

ロルド』第3巻、『マンフレッド』・・・に反映したのです。」¹¹⁾ テレサがこのように表現しているように、当時のバイロンにとっては、人間の感受性の鈍化、さらには人間の精神活動の劣化の問題が主要テーマの一つであったと考えられる。例えば1815年に作られた抒情詩に、『Stanzas for Music (音楽に寄せて)』がある¹²⁾。この詩では、瑞々しかった感受性が鈍化してゆくことへの悲哀が主題となっている。すなわち精神活動の劣化がやはり主題とされているのである。感受性の鈍化に代表される、人間における精神活動の劣化の問題は、当時のバイロンにとって切実な問題であり、『シヨンの囚人』においてはそのテーマが極めて特異な形で呈示されたものと、想定することができる。

『シヨンの囚人』はバイロンの代表作の一つとみなされ、イギリス国内で少なからぬ文学的影響をもたらした。たとえばテニソンの詩 *The Lady of Shalott* (シャロット姫) への影響が確実視されている¹³⁾。テニソンのこの詩は明治20年代に日本語に翻訳されて、早くから日本でも愛好された作品である。

III. 日本における『シヨンの囚人』の翻訳

1. 日本語訳の概況

バイロンの著作の日本語への翻訳は、イギリスのロマン派詩人としては比較的早く、明治12年(1879年)の『髑髏杯歌』が最初とされている。その後『マンフレッド』、『パリジナ』、『ドン・ジュアン』、『チャイルド・ハロルド』、『マゼッパ』、『海賊』などの部分訳や全訳が発表され、また若干の叙情詩も翻訳されてきた。『シヨンの囚人』の翻訳が初めて発表されたのは明治38年のことで、雑誌「新声」誌上の浦瀬白雨訳『「チロン」の俘囚』がそれである。翌39年には西村酔夢訳が発表された。さらに明治41年には榎本秋村訳が雑誌「文庫」に、『シヨンの囚人』として発表された。明治44年刊行の岡村愛蔵による『須因頓氏／英文学詳解』には、ワーズワス、コールリッジ、シェリーなどの著作と共に、『シヨンの囚人』も掲載された¹⁴⁾。はるか下って昭和11年に5巻本のバイロン全集が那須書房から刊行され、岡本成蹊訳の『シヨンの囚人』が第1巻に収録された。

長詩『シヨンの囚人』がイギリスで刊行されたのは1816年であったから、日本語に初訳されたのはそれからほぼ90年を経てからであった。その後30年ほどで数種類の翻訳が発表されたわけであり、この長詩がバイロンの代表作の一つとして日本でも愛読されていたことが推察される。

2. 日本語訳『シヨンの囚人』の特徴

明治22年にゴールドスミスバラードを翻訳した荻村

段山は、原文に忠実に訳すことが翻訳の絶対条件であることを強調したが、日本の翻訳界においては、原文に忠実であることを最重要視する風潮が比較的早い時期から定着していたものと思われる¹⁵⁾。『シヨンの囚人』の各日本語訳においてもそのことが明らかに見て取れるのだが、しかしこうした傾向は外国での翻訳においては必ずしも当てはまらず、例えばロシアでは全く異なる傾向を示している。『シヨンの囚人』の両言語への訳を検討し比較することによって、そのことを確認してみたい。

日本語訳としては、浦瀬訳、榎本訳、及び岡本訳¹⁶⁾の3種類を検討してみよう。浦瀬訳は散文訳であって、詩形を踏んでいない。所々に語句の省略があり、第8連や第12連にはやや大きな省略が見られる。それに対して榎本訳と岡本訳は、定型詩の形式は採っていないが、原詩に近い姿で改行が施されており、詩としての形態が保たれている。

3種類の日本語訳において、訳者はいずれも、程度の差こそあれ、まず第一に原文に忠実な訳文を、そして次に、日本語の詩として優れた表現を、目指したものと考えられる。しかしながら各訳を詳細に検討してみると、当然の事ながら、解釈の違いや表現の差異が諸処に表出してくる。それらの中から顕著な例を、連順に例示してみよう。そうすることによって、いずれの日本語訳も原文に忠実であることが最重要課題であったことが、自ずと明らかにされよう。なお、各訳者が依拠した原詩テキストは特定できていないが、ここでは同一のテキストが使用されたものと仮定して、相違点を紹介する。

第2連。牢に漏れ入る光の比喻表現としての“meteor lamp”が、榎本訳では「微かに光る蛍」と訳されているのに対し、岡本訳では「鬼火」となっている。囚人の収容状況を示した表現、“in each ring there is a chain”は、岡本訳が「環ごとに鉄鎖あり」であるのに対し、榎本訳では無視されている。

第7連。投獄されてから食事内容が変化したことを示す表現、“The milk drawn from the mountain goat was changed for water from the moat”は、榎本訳では「山羊より得たりし乳は、壕より汲む水と変わりぬ」と訳されているのに対し、岡本訳では、「始め、山羊の乳を与えられしが、後は壕の汲み水と換へられぬ」となっている。これは前者が正しい訳と思われる。また、上の弟の埋葬場面での獄吏の行為を示した表現、“they unlocked his chain”を、榎本訳は「獄吏は鎖も解かで」と訳しているのに対し、岡本訳では「獄吏は鐵鎖を解き」となっており、これは後者が正しいと思われる。弟の埋葬所に放置された鎖を見ての主人公の感慨、“Such Murder’s fitting monument!”は、榎本訳は「げに斯かる虐殺にふ

さはしき石碑なり」となっているのに対し、岡本訳は「あはれ、これぞ惨死せる者に相応はしき石碑なりや」となっている。この場合は榎本訳の方が原意に即した訳であるように思われる。

第8連。死を眼前に控えた末弟の様子を記した表現、“A little talk of better days, A little hope my own to raise”は、榎本訳では「いささかも幸福の日来るを望まざりき」となっているのに対し、岡本訳は「わが心を励まさむと、何時の日か幸福の訪づる日もあらむものと、僅かに語れり」と訳している。前者には誤訳と省略が含まれているように思われる。この箇所訳は浦瀬訳も印象的であり、次のようになっている。「彼は淋しく見とれたる我を打守りつつ、来ん日の幸の多からん事をきれぎれに口ごもりつつみまかりぬ」。

第10連。主人公は牢獄を訪れた小鳥に次のように呼びかける。“But knowing well captivity, Sweet bird! I could not wish for thine!”。この部分を榎本訳は、「囚縛をよく知れる美しき鳥よ、御身の我が運命を共にするを願わず」と訳しているのに対し、岡本訳では次のようになっている。「されど囚われの身の悲惨は、これよく知れり。あはれ、愛らしき小鳥よ、汝の捕はるることなきを願ふ。」後者の訳が正確であると思われるが、この部分は浦瀬訳も優れていて、次のように、原意を巧みに汲んだ訳になっている。「牢屋のつれなさつくづくと身に沁みて覚えし身は、ただ汝が自由の身なりしならんところ」。

以上3種類の日本語訳における解釈上及び表現上の相違点を紹介してきたが、同様の例は他の箇所からも多数拾い出すことができる。このように、省略や誤訳、そして恣意的な表現を各和訳の中に多少見出すことは容易であるが、しかし全体としてみれば、それらの比率はごく低く、従って、いずれの訳を選んで読んでも、原文の主旨はほぼ正確に伝えられると思われる。散文訳である村瀬訳が直訳からもっとも離れた訳になっているが、いずれにしても、すべての日本語訳に共通することは、まず第一に、原作の内容をできるだけ忠実に移し換えようとしていることであり、そして第二に、日本語の文章として適切で理解しやすいものにしようとしている点である。日本における『シヨンの囚人』の翻訳は、このように、原文に忠実であることが最優先されたが、しかしこの姿勢は外国の翻訳界においては必ずしも当てはまるものではなかった。そのことをロシアの事例で確認しよう。

IV. ロシアにおける『シヨンの囚人』の受容について

1. ジュコフスキー訳『シヨンの囚人』の成立と評価 『シヨンの囚人』のロシア語訳は1822年にジュコフス

キーによって刊行されている。それは原詩が発表されてわずか5年余り後の刊行であり、バイロンの著作がロシア語に翻訳された最も古い例の一つである¹⁷⁾。ジュコフスキーは1821年9月3日にシヨン城を訪れており、翻訳はその翌日から翌春にかけて行われた。一気呵成に創作された原作であったが、それを翻訳するのに、彼ははるかに多大な時間を費やしたわけである。彼はフランス語版のバイロン全集を所有しており、『チャイルド・ハロルドの巡礼』の部分訳をフランス語版から試みてもいる。しかし『シヨンの囚人』は英語版からの訳であることが、冒頭に明記されている。翻訳の刊行者であるグネジチ宛の手紙で、ジュコフスキーは刊行時に装丁や配布に関する詳しい指示を示しており、彼がこの翻訳に並々ならぬ熱意を込めていたことを明らかにしている¹⁸⁾。

ジュコフスキーの友人であった作家プレトニョーフは、この翻訳がなされた背景について、彼の外遊体験に関連づけつつ、次のように述べている。「1821年が到来した。ジュコフスキーは・・・外国へ出発した。気ぜわしくない気晴らしは詩人の心に滋養を与えた。すなわち美しい自然が実り豊かな靈感となって彼に作用したのである。・・・彼は詩の小品を別にして、1年間で3篇の長詩をロシア文学に捧げることができた。それらのタイトルはシラーの『オルレアンの少女』、ムアの『ペリとエンジェル』、そしてバイロンの『シヨンの囚人』である。」¹⁹⁾

プレトニョーフはさらにこの翻訳の意義に関して次のように記し、それがロシアにおけるバイロン評価に変化をもたらしたことを伝えている。「散文訳を読んだ後で、我々はバイロンの名前を何か奇妙なものと結び付け始め、しばしば暗いものと、そしてそれ以上にしばしば恐ろしく理解し難いものと、結び付け始めていた。しかしジュコフスキーの翻訳によって判断すれば、彼は純朴で明解で自然であることが明らかであった。」²⁰⁾

日本においても明治の初期にはバイロンは悪魔的な作家としての側面が誇張されて紹介されたが²¹⁾、ロシアにおいても類似の傾向があったことを、プレトニョーフのこの文章は示唆している。ジュコフスキーが訳した『シヨンの囚人』によって、バイロン文学は以前より正確な姿でロシアに伝えられたわけである。

この翻訳に関して重要な指摘を残したもう一人の作家はプーシキンである。1822年6月27日付けの手紙で、翻訳の刊行を心待ちにしていることを記し、その一ヶ月後のグネジチ宛手紙で、読後感を次のように伝えている。「ジュコフスキーの翻訳は驚くべき傑作だ。・・・精神錯乱の最初の諸徴候を、かくも重苦しい事実によって表現するためにはバイロンでなければならぬし、またそれを表現し直すためにはジュコフスキーでなければなら

ない。」²²⁾ ウォルター・スコットと同様に、プーシキンもこの長詩の主題を、人間の精神活動の劣化の問題として掌握していたわけである。それはまた翻訳者ジュコフスキーの理解でもあった。彼はそれと同一テーマを扱ったもう一つの作品「音楽に寄せて」を、数多いバイロンの叙情詩の中から唯一選んで訳しているのである。

その一方でジュコフスキーは、バイロンが『シヨンの囚人』に添えた短詩「シヨン城詩」を、自らの翻訳に添えていない。自由を讃美したこの短詩を公にしなかったことには、検閲に対する彼の配慮が働いたものと想定される。ロシア政府は早い時期からバイロンの著作を警戒し、翻訳に対しても厳しい規制を施していたのである。そのような厳しい状況下で進められた『シヨンの囚人』の翻訳であったが、それはロシアの作家たちから歓迎され、新たなバイロン像の形成に寄与することになった。

2. ジュコフスキー訳『シヨンの囚人』の特徴

概してジュコフスキーの翻訳はいわゆる直訳・逐語訳が少なく、多くの場合、原作に改変が施されている²³⁾。『シヨンの囚人』もその例に漏れず、原作から大きく逸脱している箇所が多い。しかし原作の基本的な構成と内容は保持されていて、いわば「ジュコフスキー版シヨンの囚人」とも言うべき独特な訳詩に変容している。それは原作に忠実な訳を旨とした日本語訳と著しい対照を成しているが、次に両者を比較対照することによって、そのことを証明してみよう。

改変は様々な形でなされているが、ここではそれを、省略、追加、単純な語句の変更、及び内容に係わる変更の4種類に分けて紹介したい。そしてその後に、最終第14連を原詩と共に引証して、ジュコフスキー版『シヨンの囚人』の実態に直接触れてみたい²⁴⁾。

(1) 省略の例。ロシア語に訳されていない場合である。

省略部分の原文と和訳例を示す。

第3連。囚人の状況を記した原文。

“Fettered in hand, but joined in heart.”

「手枷かけられしも、心は結合れて、ただひとつ。(岡本訳)

第4連。下の弟の容姿を記した原文。

“For he was beautiful as day----

(When day was beautiful to me

As to young eagles, being free)----

A polar day, which will not see

A sunset till its summer's gone,

Its sleepless summer of long light,

The snow-clad offspring of the sun.”

「驚に日の美はしきが如く、

彼は日の如く我が眼に美はしかりき
 太陽の雪衣の子とも云うべき
 照り輝く長き夏の終わるまで
 没せざる極地の日の如く美はしかりき」(榎本訳)

第6連。シヨン城周辺の湖の深さを表す原文。

“Thus much the fathom-line was sent
 From Chillon’s snow-white battlement,”
 「波に取り囲まれし雪白き城壁より
 測量線の垂下されしことも幾度なりしか」(岡本訳)

第14連。クモや野ネズミに対して主人公が親愛の情を述べた原文。

And why should I feel less than they?
 We were all inmates of one place,
 And I, the monarch of each race,
 Had power to kill---yet, strange to tell!
 In quiet we had learned to dwell;
 「ああ、などかわれに彼等にまさる感慨なからむ。
 われ等は皆一所に住みて親しく、
 われはこれ等のものの活殺の権を握りて王位にあれど、
 ああ、不思議にも、われ等は平和の中に暮らすことを
 知りたり。」(岡本訳)

以上はジュコフスキー訳では完全に省略された事例である。同様の箇所は他にも多い。そうした箇所に対して、各日本語訳においては、苦心の跡が滲み出た優れた訳が施されていることに留意したい。

(2) 追加の例。バイロンの原文には無い文章が追加された場合である。その部分のロシア語と日本語大意を記す。

第2連。下の弟の死に際しての主人公の気持ち。

“И к воле я душой остыл”
 (自由に対する私の心は冷えてしまった。)

第7連。上の弟が死亡した際の描写。

“Не мог закрыть потухших глаз;”
 (光を失った両眼を閉じてやることもできなかった。)

第8連。下の弟が死亡した姿の描写。

“Он на столбе — как вешный цвет,
 Убитый хладом, — предо мной
 Висел с поникшей головой”
 (彼は柱にもたれていて、まるで寒気に打たれた春の花のように。私の前で頭をうなだれて垂れ下がっていた。)

第14連。自由を享受できない心境に陥った嘆き。

“И... столь себе неверны мы!...”
 (我々は如何に自分に対して不実であることか！)
 原文に追加された文章例を以上に示したが、そのような箇所は他にも多くある。例えば、第8連では、2人の

弟に先立たれても生きていられるのは faith (信仰) のためだけである、と原文に記されているのに対し、訳文では次の1行が追加されている。“Иль хладность к жизни жизнь спасла” (それとも命を救ったのは人生に対する冷淡さか。) 第13連では、格子窓から眺める景色の描写が加筆されている。村や街の状況描写が加えられ(ロシア語訳第26-30行)、さらに、シヨン城に接岸され出帆してゆく小舟の動きが書き加えられている(同第41-46行)。

このようにジュコフスキーは原文に無い文章を数多く自分自身で創作して追加している。日本語訳の場合にはそのような例はほとんど皆無である。

(3) 単純な語句の変更の例。

第5連では“deer”が“Benpu”(イノシシ)に変更されているし、第6連では、“A thousand feet in depth”がただ単に“неизмерима”(測りがたい)と訳されている。この部分は日本語訳では、「深さ千尺」(岡本訳)や、「底ひ知らぬ千尋の下」(浦瀬訳)のように、数字まで生かした訳が工夫されている。さらに第7連では、“the mountain goat”が“альпийские козы”(アルプスの山羊)になり、また、“water from the moat”が、“смрадная вода”(悪臭を発する水)に変更されている。それらは日本語訳では、原意に即して「山羊」、「濠の汲み水」(岡本訳)とだけ訳されている。

(4) 内容に関わる変更の例。内容そのものが改変された例である。

第1連。主人公の親兄弟の人数に関して、原文では“We were seven”と書かれており、既に死亡した兄弟が3人、獄中の兄弟が3人、そしてそれに父親が合わされた数値として解釈できる。しかしロシア語訳では次のように書かれている。“Нас было шесть”(我々は6人だった)。兄弟の数が5人に変更されているのである。原文の表現にやや曖昧さが残されているので、ジュコフスキーは自身の判断ですっきりした形に改めたものと思われる。因みに日本語訳ではいずれにおいても7の数字が残されている。

第8連。主人公が目撃した人間の悲惨な死に方三態が、原文では終始抽象的な表現で描写されているのに対し、ロシア語訳では具体的な姿で呈示されている。すなわち、戦いに倒れた兵士、板にしがみついて溺死する泳ぎ手、及び、神を冒涇しつつ息絶える悪人として呈示されている。

第10連と第12連。ここでは原文の一部が、ロシア語訳ではほぼそっくり別の連に移行されている。原文の第10連には、末弟の死を悲しむ、もしくは彼の表象としての小鳥の消失を悲しむ主人公の心境として、次の比喩表現が用いられている。

“Lone----as a solitary cloud,
 A single cloud on a sunny day,
 While all the rest of heaven is clear,
 A frown upon the atmosphere,
 That hath no business to appear
 When skies are blue, and earth is gay.”

「又は晴天の侘びしき孤雲、
 空青く、地美なる時みえざる
 一片の雲の如くならしめざらん。」（榎本訳）

ロシア語訳の第10連ではこの部分は完全に省略されている。しかし驚くべき事に、それはほぼ完全な形で第12連で復活している。現世で祝宴が催されたとしても自分が占める座は無いであろうと、主人公は空想し、その寂しさの比喩表現として、次のロシア語が挿入されているのである。

“Как облако, при ясном дне
 Потерянное в вышине
 И в радостных его лучах
 Ненужное на небесах...”

以上4項目にわたってジュコフスキーによる改変を紹介してきたが、そのことによって、『シヨンの囚人』をロシア語に翻訳するに際して、彼が実に多様な改変を試みたことが理解できた。そしてこれらの改変は翻訳詩の中にごく自然に収まっていて、些かの違和感も与えない。これは明らかに彼が自分自身の文学的センスに従って実施した意図的な改変であって、このような改変は日本語訳においては決して見出すことができない。翻訳にはその翻訳者の翻訳観が反映されているとすれば、翻訳に対するジュコフスキーの姿勢が、日本の翻訳者たちの姿勢と根本的に異なるものであったことが理解されよう。

ジュコフスキーの詩の特徴を実際に味わうために、次に最終第14連のロシア語訳を、原文と共に引用しておこう。この翻訳詩がロシア語の詩として形式面で完成されたものであることが一目瞭然となる。見事な定型詩に仕上がっており、8音節の弱強格が脚韻を終始保持しつつ、14連251行を成している。

(原文)

“It might be months, or years, or days----
 I kept no count, I took no note----
 I had no hope my eyes to raise,
 And clear them of their dreary mote;
 At last men came to set me free;
 I asked not why, and recked not where;
 It was at length the same to me,

Fettered or fetterless to be,
 I learned to love despair.
 And thus when they appeared at last,
 And all my bonds aside were cast,
 These heavy walls to me had grown,
 A hermitage----and all my own!
 And half I felt as they were come
 To tear me from a second home:
 With spiders I had friendship made,
 And watched them in their sullen trade
 Had seen the mice by moonlight play,
 And why should I feel than they?
 We were all inmates of one place,
 And I, the monarch of each race,
 Had power to kill----yet, strange to tell!
 In quiet we had learned to dwell;
 My very chains and I grew frineds,
 So much a long communion tends
 To make us what we are:----even I
 Regained my freedom with a sigh.”

(ロシア語訳)

“День приходил—день уходил—
 Шли годы—я их не считал;
 Я, мнилось, память потерял
 О переменах на земли.
 И люди наконец пришли
 Мне волю бедную отдать.
 За что и как? О том узнать
 И не помыслил я—давно
 Считать привык я за одно;
 Без цепи ль я, в цепи ль я был,
 Я безнадежность полюбил;
 И им я холодно внимал,
 И равнодушно цепь скидал,
 И подземелье стало вдруг
 Мне милой кровлей... там все друг,
 Все однодomeц было мой:
 Паук темничный надо мной
 Там мирно ткал в моем окне;
 За резвой мышью при луне
 Я там подсматривать любил;
 Я к цепи руку приучил;
 И... столь себе неверны мы!...
 Когда за дверь своей тюрьмы
 На волю я перешагнул—

Я о тюрьме своей вздохнул.”

3. 日本語訳とロシア語訳との比較的考察

『シヨンの囚人』の各種日本語訳とジュコフスキーのロシア語訳とを比較することによって、前者はいずれも原文に忠実な訳であり、後者が自由で奔放な訳であることが確かめられた。筆者は先に、ゴールドスミス作『隠者』の日本語訳とロシア語訳とを比較して、前者を精確で几帳面な翻訳、そして後者を荒削りで大らかな翻訳と性格づけたが²⁵⁾、この特徴づけは『シヨンの囚人』の翻訳においてもそのまま当てはまる。

ロシア語訳『シヨンの囚人』は、翻訳者の文学的才覚に支えられて、原作が英語圏の読者に与えたと同じ程度の、あるいはそれ以上の感銘をロシアの読者に与えたものと思われる。自由訳を大胆に呈示することによって、ジュコフスキーは人々の心をとらえ、その後のロシア文学に寄与したわけである。しかしそこにはマイナスの側面もあり、失われたものも多かったはずである。彼が自分自身の判断によって——語学上の理由による場合も多少あったと考えられるが——捨象した原文の中には、いかにもバイロンらしい独特の表現が含まれている。日本の翻訳家たちはそのような箇所をも美しい日本語に移し換えようと努力し、見事に成功している。忠実な訳を最重要視する翻訳方法によって、日本の読者は、美点と欠点を併せ持つありのままのバイロンに接することができたと言えよう。逆にロシアの読者は、ジュコフスキーによって色づけされ変容されたバイロンに接することを、余儀なくされたのである。原作に飽くまで忠実であろうとする日本人のこのような心構えは、翻訳においてのみ示されたものではないだろう。それは西洋文化受容の全般に発揮されて、計り知れない利益を日本にもたらしたものと思われる。

ジュコフスキー訳『シヨンの囚人』は翻訳としてよりも、むしろ翻案として位置づけられるべきかもしれない。彼の翻訳はロシア語でしばしば“вольный перевод”（自由訳）と表現される。若い日の彼はその方法をバイロンの作品だけでなく、シラー、サウジー、スコット等、多くの西欧作家の著作の翻訳にも採用した。原作を忠実に訳すのではなく、それを自身の文学的センスに従って改変し、優れた独自の翻訳作品を創造することは、多大な困難を伴う営みと考えられる。この問題に関して、プレトニョーフは次のように述べている。「作者と等しい才能を持たない翻訳者は、常に稚拙な翻訳者だろう。なぜならば、彼は思想を理解しても、それを自己の思想へ変容できず、その結果読者への伝え方が弱く冷たいものとなるからだ。ジュコフスキーが訳すように訳すことは、創作するのと全く同じであると、敢えて断言しよう。」²⁶⁾

この文章から想定されるように、ジュコフスキーの文筆活動は翻訳と翻案との間を駆け巡っていた。彼は両方法を巧みに採用することによって、西欧の文学をロシア化し、ロシアに普及させたのである。

ある国が進んだ外国文学を受容する場合、翻訳と翻案という二つの方法が並行して採用されるように思われる。ロシアではジュコフスキーにその顕著な例を見出すことができたが、日本においても『シヨンの囚人』の受容に際して同じ状況が生じている。次にその問題を考察してみよう。

V. 北村透谷作『楚囚之詩』について

1. 『楚囚之詩』と『シヨンの囚人』との関係

日本における『シヨンの囚人』の受容を考察する際には、和訳の刊行に約20年先だって執筆された北村透谷著『楚囚之詩』に言及することが必須である。透谷は明治22年（1889年）4月9日、20歳の若さでこの長詩を発表した。彼が初めて世に問うた作品であり、自費出版であった²⁷⁾。透谷は「自序」の中で刊行の目的を、「狭隘なる古来の詩歌を進歩せしめ」ることである、とし、さらに次のように述べている。「元とより是は吾国語の所謂歌でも詩でもありませぬ、寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です・・・」²⁸⁾ 小説に似ていて詩である、という指摘から連想されるのは、古くから西洋に流布していた「物語詩」(narrative poems) という形式である。透谷は、スコットやバイロンが好んで用いたこの文学形式を念頭においていたものと思われる。外国文学の刺激を受けて新体詩運動が高揚する中で、自らも新しい詩形式を希求しようとする透谷の心意気が、この「自序」には明白に表れ出ている。透谷全集の編者は、『楚州之詩』の刊行が訳詩集『於母影』に先立つものであることを指摘した上で、次のように記す。「実に近代日本ロマン派の詩書として、また自由律の長詩を掲げた詩書として最初のものである。」²⁹⁾

『楚囚之詩』がバイロンの『シヨンの囚人』から強く影響された作品であることは、多くの研究者が指摘している³⁰⁾。後者無くして前者があり得なかったことは、両者を比較しつつ一読するだけで十分である。形式面について言えば、両者共に囚人たる主人公の回想記の形をとっている。場面展開に関しては、政治犯による投獄、同房者の消失、それによる主人公の精神的失調、小鳥の来訪、そして主人公の釈放と、同一のパターンで話が展開される。これらのモチーフが、『シヨンの囚人』においては14連の、そして『楚囚之詩』においては16連の、類似した形式とテンポで表現されているのである³¹⁾。しかも両者には似通った文章表現が数多く存在する。牢に漏れ入

る光の様子（バイロン原作第2連）、愛する者に去られた寂寥感（同第9連）、及び小鳥に関する一連のエピソード（同第10連）の描写は、『楚囚之詩』の第3連、第10連、及び第14、15連の叙述と、各々酷似している。

これらの諸事実は、透谷がバイロンの原作を熟読玩味し、感動を覚え、それを典拠として自著を綴ったことを示している。「自序」には、「或時は翻訳して見たり、又た或時は自作して見たり、いろいろに試みます」と記されている。バイロンの原作が透谷に創造への強い刺激を与えたことが明らかであり、逡巡の結果彼は「翻訳」ではなく、「自作」の方法を選んだわけである。それは「翻訳」ではなく「翻案」の方法を選んだと言い換えても差し支えあるまい。単なる模倣とは異なって、翻案には創造性が強く発揮される可能性が含まれている。そのことを念頭に置きつつ、次に両作品を比較してみよう³²⁾。

2. 『シヨンの囚人』と『楚囚之詩』の相違点

『楚州之詩』の基本的な筋は『シヨンの囚人』のそれに類似しており、しかも前者には後者の逐語訳かと思わしき箇所が多数存在する。しかしそれと同時に両者の間には多くの相違点も存在しており、『楚囚之詩』の中には、独立した創作作品としての固有の要素を多々見出すことができる。そこで次に主要な相違点を5項目に分けて、紹介してみよう。

（1）囚人の構成について

『シヨンの囚人』では囚人は主人公とその弟2人であるが、『楚囚之詩』では主人公とその花嫁、及び政治活動の同志3人の、計5人となっている。花嫁たる女性が囚人に含まれることによって、後者には前者とは異質の、艶めかしい性格が付与された。

（2）獄舎と囚人の状況について

『シヨンの囚人』では、獄舎はシヨン城内部の牢であり、シヨン城はレマン湖の深い水域にあって、水面下の牢には、水しぶきが絶えない。3人の囚人は同室にいるが、各人が鉄鎖で柱に結わえ付けられて、移動もできず、鉄鎖が肉体に食い込み苛んでいる。一方『楚囚之詩』では、広い獄舎は四つに仕切られてはいるが、囚人達には——少なくとも主人公には——多少の移動が許されている。しかも主人公は自分の花嫁を眺めることさえできる。囚人の境遇のこのような相異によって、前者に一貫して漂っている緊迫した悲壮感が、後者では完全に失われている。

（3）主人公の同房者の運命について

『シヨンの囚人』では、2人の弟が間をおいて獄死し、二つの死に直面する主人公の体験と心理が、前半のクライマックスを構成している。死を直接に体験することによって、彼の精神は疲弊し枯渇してしまう。一方『楚囚

之詩』では、同房者たちは花嫁をも含めて、主人公が眠っている間に消失するに過ぎず、彼はその消失理由を、「他の獄舎に送られけん」と想像する。死と対峙する主人公の心理描写を通じて、前者は人間精神が体験しうる極限を読者に伝えているが、後者では、死の場面が捨象されることによって、主人公の痛みははるかに薄らいだものになっている。

（4）実景描写の有無について

『シヨンの囚人』では、小鳥に去られた主人公は、土壁に足場を作り、格子窓から自然界を眺める。彼は長年封印してきた知覚を外界に解放することによって、人間に本来の喜びを一瞬感受する。しかし彼は光に耐える力をすでに失っており、牢の闇の世界に再び安堵を見出す。一方『楚囚之詩』ではこのような実景描写は設定されずに、いきなり大団円が導入される。実景描写に代わるものとして、後者には回想描写が折々取り入れられている。しかしそのことによって、前者からは明らかに看取できる深い喪失感が後者では失われて、全般的に曖昧模糊とした雰囲気漂っている。

（5）結末について

最終連はどちらも主人公の釈放によって結ばれているが、釈放時の彼の心境は対照的な姿で描かれている。『シヨンの囚人』の主人公は釈放に喜びを感じず、むしろ、馴染んでしまった獄中生活に未練を覚える。一方『楚囚之詩』では、主人公は多くの朋友、そして最愛の花嫁にも迎えられて、一同揃って嬉し涙を流す。対照的なこのような結末によって、両作品は決定的に異質な印象を帯びることになった。

以上5項目にわたって『シヨンの囚人』と『楚囚之詩』との間の主な相違点を整理してきたが、こうした構成上の相違点を検討することによって、一つの重要な事柄が明らかにされた。それは『シヨンの囚人』では明白な主題が、『楚州之詩』では失われている、あるいは薄められていることである。既に述べたように、バイロンは周到に状況を設定して、主人公の精神が疲弊し崩壊しゆく経過を明示したが、透谷はそうした状況そのものに変更を加えたために、一貫した主題を呈示し得ずに終わっている。『楚州之詩』で述べられた様々なエピソードは、一つの主題に向けて収斂されているとは言い難いのである。

透谷はむしろ、バイロンの原作を利用して、自分自身の思念を表現したかったのであろう。舞台と登場人物ををスイスから日本に移すことによって、透谷は自分自身にとって身近で重要な世界を表現しようとした。従って『楚囚之詩』には透谷自身の体験と思念が歌い込まれているのである。それは上述した構成上の相違点に何より

も明瞭に表れているが、さらに次の諸連でも顕著である。第4連と第5連の後半。主人公と花嫁との関係が説明されている。「吾が花嫁の美は、其蕊にあり」、と彼女は称えられ、主人公と彼女は強い精神的な愛で結ばれている。主人公の魂は牢獄を抜け出て花園に遊び、「バイヲレット」や「フォゲットミイナット」などの花を、彼女から与えられる。第11連と第12連。蝙蝠に関するエピソードが挿入されている。主人公は蝙蝠の来訪を、死んだかもしれない花嫁の来訪と想像する。哀れを通り越して、やや滑稽な感を覚える場面であるが、しかし蝙蝠を衣服で捕らえ、取り抑えて泣かせる描写には、奇妙な現実感が漂っている。第13連。主人公が故郷を回想する。故郷の山や溪流、鷺や魚、野の花などが回想され、そこへの回帰が願望される。回想場面は第5、6、8連などにも挿入されている。

『楚囚之詩』は、透谷が自分自身の体験を散りばめたことによって、独特の日本的な情緒をまとうことになった。日本の情緒は作品全体に流れており、例えば第11連では「暁の鶏」や、「埤に急ぐ鳥の声」が主人公の耳に聞こえたりする。また、月に対する主人公の特別な愛着が繰り返し述べられていて、富士登山や隅田の川遊びと関連して月の美しさが称賛され（第6連）、窓辺に寄って主人公は漏れ入る月の光に見とれたりする（第7連）。

透谷はこの著作を刊行する5ヶ月ほど前に結婚式を挙げている。彼の恋愛体験と女性観は、作品中の女性描写に投影されたものと考えられる。また刊行の約2か月前に明治憲法が発布されて恩赦が成立したが、それが最終連のハッピーエンドに影響したと言われている³³⁾。さらに、蝙蝠のエピソードや、一連の回想場面も、透谷自身の体験に基づくものと推定される。透谷は「翻訳」ではなく「自作」を選ぶことによって、自分自身の『シヨンの囚人』を創作したかったのであろう。

3. 透谷とジュコフスキー

——外国文学受容における翻訳と翻案——

透谷がバイロンの原作を典拠として『楚州之詩』を著したことは、ジュコフスキーの文筆活動を想起させる。既に見たように、ジュコフスキー訳『シヨンの囚人』は翻訳であるにしても、限りなく翻案に近い翻訳である。他の原作に対しても、彼は大幅な改変を試みており、翻訳であるよりもむしろ翻案に相当する場合がしばしばである。ビュルガーのバラード『レノーレ』は、『リュドミラ』と『スヴェトラナ』という、表題も内容も異なる2種類のバラードに改作された。サウジーのバラード『ルーディガー』とスコットのバラード『フランシスコ修道士』は、それぞれ『アデリスタン』、『懺悔』と改題されて、表題と同様に、内容も大幅に異なるバラードに

仕立て上げられている。そうすることによってジュコフスキーは自分自身の体験と思念を投影し、できた作品はロシア的な衣装をまとうものとなった。

ロシアでは翻案活動はジュコフスキーに止まらなかった。例えばプーシキンもこのような創作活動を展開しており、二つの物語詩『ヌーリン伯』と『アンジェロ』は、それぞれシェイクスピア作『ルクレティアの凌辱』、『尺には尺を』からの影響が強く、一種の翻案とみなされる。透谷による『楚州之詩』も、ジュコフスキーやプーシキンのこれらの作品と同類として捉えることができよう。そして日本でもこうした試みは透谷だけのものではなく、様々な文芸分野で実施されてきた。例えば仮名垣魯文の『葉武列士倭錦絵』（1886年）もそうした試みの一つと見なすことができる³⁴⁾。

ロシアは18世紀から19世紀前半にかけて西欧文学を受容し、一方日本はその後を追うように、19世紀後半から20世紀にかけて西洋文学の受容に邁進してきた。どちらの国においても受容の方法は多様であり、純然たる翻訳が主流とは限らなかった。創造意欲に富む才能豊かな文筆家たちは、原作を利用しつつも、自己の創造性をも発揮できる方法を模索した。出来上がった作品のあるものは、彼ら自身の体験と思念が織り込まれることによって、原作とは一風異なる、個性的な魅力を獲得し、人々に愛読された。当然のこととして、原作にはなかった国民的な性格も付与された。このようにして成立した作品を、「翻案文学」と総称するならば、翻案文学は翻訳文学と並んで、日本とロシアの両国で重要な役割を果たしたのと考えられる。そして両国で翻案文学が隆盛したことは、とりもなおさず、受容に先立って両国が優れた伝統文化を培っていた国であることを、証明しているように思われる。

西欧文学の受容において、透谷とジュコフスキーは、翻案という方法を用いたことによって、同質の役割を果たしたとすることができる。しかし両国の文学史を振り返った場合、透谷はジュコフスキーよりも困難な立場に置かれていたと考えられる。ロシアは一世紀もの長い時間をかけて、ロシア詩の形式の改良に努めており、ジュコフスキーはすでに確立された作詩法で翻訳や翻案に勤しむことができた³⁵⁾。それに対して透谷はより実験的な段階から始めなければならなかったからである。

ジュコフスキーが訳した『シヨンの囚人』は、ロシアに多くの愛読者を獲得した。一方『楚州之詩』はさほど人口に膾炙しなかったものと思われる。それには文学作品としての完成度が未熟であったことも関連していたかもしれない。しかし若き透谷が和訳に先駆けて、『シヨンの囚人』の翻案化に挑戦した事実は、極めて重要であ

る。翻案という方法が、ロシアにおけると同様に日本でも、翻訳と並ぶ主要な役割をごく初期から果たしたことが、証明されるからである³⁶⁾。

VI. おわりに

バイロンが著した多くの物語詩、詩劇、そして叙情詩群にあって、『シヨンの囚人』は、緊張感が漲って完成度が高く、程良い長さも相俟って、美しい独立峰の趣を呈している。自由への希求のテーマを後景に配しつつ、それは獄中における人間精神の劣化の問題を主要テーマとして、明白に前面に打ち出している。極限状態にあって人間の感性と知性が次第に疲弊し崩壊しゆく過程が、冷徹な筆致で描かれていて、読者は胸の締めつけられるような陰鬱な読後感を覚える。精神活動の衰退は、獄中という特殊な状況下でのみ進展するものではない。青春を過ぎた人間が誰でも感受性の衰微を実感するように、精神活動の鈍化は、死に至るまですべての人間が体験する一般的な事象である。そのような観点から捉えるならば、『シヨンの囚人』は何時の時代にも今日的な価値を獲得し得る。

原作の発刊後6年足らずでロシアで発表されたジュコフスキー訳『シヨンの囚人』は、多くのロシア人に特別の思いで読み継がれた作であったと想像される。刊行の数年後には、デカブリストの乱が発生し、多数の参加者が処刑されたし、それ以降も帝政時代、ソヴェート時代を通じて、ロシアでは投獄は稀ではなかったからである。ジュコフスキー以外の訳者による翻訳があったかどうかについては、今後の研究に待たねばならないが、彼の文名が際立っていただけに、一般に流布したのは彼の翻訳だけであったと思われる。

日本では『シヨンの囚人』は原作刊行後90年を経て翻訳された。バイロン人気はヨーロッパに約1世紀遅れて日本に及んだわけだが、それには自由と革新を求める明治の時代風潮が寄与したのであろう。数種類の翻訳があったことは、内容の暗さに係わらず、それが日本でも少なからぬ読者を獲得したことを示している。日本における『シヨンの囚人』の受容で殊更興味深いことは、透谷による翻案の試みである。翻訳に先駆けて『楚州之詩』を創作することによって、彼は明治期における西洋文学受容の多彩なあり方を今日に示している。

バイロンの原作が日本とロシアで受容された状況を比較することによって、二つの興味深い事実が明らかにされた。一つは翻訳に関することであり、日本語訳の方が、ロシア語訳よりもはるかに原文に忠実であることが証明された。もう一つは翻案に関することであり、日本でもロシアと同様に、西欧文学の受容において翻案が翻訳と

並んで重要な役割を果たしたことが明らかにされた。

しかしいくつかの新しい問題も提起されている。自由で奔放な翻訳を育み許容した精神的風土は、その後のロシア文学の発展とどのような関係を持ったのだろうか。原作に忠実であることを尊ぶ日本的な価値観は、日本文学の歩みにその後どう反映されたのだろうか。さらにそれは、日本の文化全般の急激な進展にどのように寄与したのだろうか。翻案は日本とロシアでは外国文化の受容で重要な役割を果たしたが、それはすべての国に普遍的な受容方法なのだろうか。それとも優れた伝統文化を培ってきた国にのみ固有の現象なのだろうか。比較受容の事例研究を積み重ねていくことによって、これら様々な問題にも、解決の糸口が見出されるものと期待される。

註釈

- 1) イヴ・シュヴレル『比較文学』(福田陸太郎訳)(白水社、2001年)、78-80頁を参照。
- 2) 拙稿「日本とロシアにおける英文学の受容について」(『川田淳一郎教授・小日向哲教授定年退任記念基礎論叢』、東京工芸大学芸術学部基礎教育課程、2001年)を参照。
- 3) バイロン『ドン・ジュアン下』(小川和夫訳)(富山房、1993年)年譜; 楠本哲夫『永遠の巡礼詩人バイロン』(三省堂、1991年)第3章; 田吹長彦『ロード・バイロンチャイルド・ハロルドの巡礼第3編、注解』(九州大学出版会、1993年)が参考になった。
- 4) *The Works of Lord Byron: with his Letters and Journals, and his Life, by Thomas Moore* (London, 1832), v. 3, p. 247 を参照。
- 5) *Ibid.*, pp. 284-285.
- 6) *The Works of Lord Byron*, v. 4, p. 27 を参照。
- 7) ルソー『新エロイズ』(4)(安土正夫訳)(岩波文庫、昭和43年)、288頁。
- 8) 出典は*The Works of Lord Byron*, v. 10 に拠る。
- 9) *The Works of Lord Byron*, v. 10, p. 223.
- 10) *Ibid.*, p. 242. なおスターンに関する記述は、『センチメンタル・ジャーニー』、『囲われ人』を参照。
- 11) Chris Hart (ed.), *Lives of the Great Romantics by their Contemporaries*, v. 2 (London, 1996), pp. 317-318.
- 12) *The Works of Lord Byron*, v. 2, pp. 270-272 を参照。
- 13) Andrew Elfenbein, *Byron and the Victorians* (Cambridge, 1995), pp. 174-181 を参照。
- 14) 『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》』15(大空社、1998年)、375-377頁を参照。
- 15) 同3、175-180頁を参照。また山田博光『北村透谷と国木田独步—比較文学的研究—』(近代文芸社、1990年)、「第2章明治前期における英文学受容」を参照。
- 16) 浦瀬訳と榎本訳は『明治翻訳文学全集』15に、岡本訳は『バイロン全集』(復刻版)(日本図書センター、1995年)に依拠した。なおバイロンの原詩は註8に記載した書籍に依拠した。
- 17) ジュコフスキーの翻訳活動については拙著『近代ロシア文学の成立と西欧』(成文社、2001年)、44-50頁を参照。
- 18) ジュコフスキーの翻訳状況については次の著書の註釈に依拠した。Английская поэзия в переводах В. А. Жуковского (М., 2000)
- 19) В. А. Жуковский в воспоминаниях современников (М., 1999), стр. 393.

- 20) Английская поэзия в переводах В. А. Жуковского, стр. 366
- 21) 薬師川虹一「バイロン受容の問題点」、『明治翻訳文学全集』15、367-369頁を参照。
- 22) 註19に記載した書籍、274頁。
- 23) ジュコフスキーの翻訳の特徴については前掲拙著53-66頁を参照。
- 24) ジュコフスキー訳は註18記載の著書275-301頁に依拠した。
- 25) 註2記載の拙稿、115頁を参照。
- 26) Английская поэзия в переводах В. А. Жуковского, стр. 366.
- 27) 勝本清一郎編『透谷全集』第3巻(岩波書店、1981年)602頁(年譜)を参照。
- 28) 同第1巻(昭和47年)4頁を参照。なお以下の『楚州之詩』の引用は、すべて同書(3-33頁)に依拠した。
- 29) 同414頁。
- 30) 例えば、平岡敏夫『北村透谷研究評伝』(有精堂、1995年)；安德軍一「透谷とバイロンとの詩的交響」『透谷と近代日本』(翰林書房、1994年)など。
現代の観点からすれば、『楚囚之詩』は一種の盗作に相当する作品であろう。しかも透谷は『シヨンの囚人』から影響について何ら言及していない。これは現代の常識からすれば明らかに断罪されるべき行為である。しかし当時の常識からすれば、許容すべき一般的な行為であったと想定される。今日的な観点から見て「盗作」や「剽窃」に相当する翻案活動は、文学の受容史においては必然的な一過程を形成しているとも考えられる。この問題は日本及び諸外国の受容事例と関連づけて、別に改めて考察されなければならない。
- 31) 因みに原詩と各翻訳、及び『楚州之詩』の各連を構成している行数を表にまとめると次のようになる。

連 作品	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	計
バイロン 原詩	26	21	21	23	15	19	38	67	20	49	18	14	34	27			392
ジュコフ スキー訳	26	25	22	20	14	20	46	76	24	50	17	21	49	25			435
楚州之詩	8	24	28	30	28	19	16	16	15	12	23	19	20	39	29	16	342
榎本 訳	27	18	19	19	13	17	39	63	19	40	14	11	28	27			354
岡本 訳	29	20	22	22	15	18	39	73	24	53	17	14	35	28			409

- 32) 『楚州之詩』については多くの研究が発表されているが、それらの中で次の諸著作が参考になった。小川和夫『明治文学と近代自我—比較文学的考察—』(南雲堂、1982年)；橋詰静子『透谷詩考』(国文社、1994年)；北村透谷研究会編『透谷と近代日本』(翰林書房、1994年)；平岡敏夫『北村透谷研究評伝』(有精堂、1995年)；尾西康充『北村透谷伝—近代ナショナリズムの潮流の中で—』(明治書店、1998年)；中村良雄「北村透谷と西洋文学—西洋文学受容史のために(8)—」『明治翻訳文学全集』15。
- 33) 『透谷全集』第1巻、416頁；尾西前掲書第3章第4節を参照。
- 34) 細谷千博、イアン・ニッシュ監修『日英交流史 1600-2000 5 社会・文化』(東京大学出版会、2001年)第4章「翻訳すべきか、せざるべきか」を参照。
- 35) 詳しくは川崎隆司『ロシア詩の歴史』(恒文社、1993年)、第4、5、6章を参照。
- 36) 日本における西洋文学の受容に関しては、島田謹二『日本における外国文学』上下(朝日新聞社、1976年)に詳しい。